

成蹊大学文学部スペシャル・レクチャーズ

『英語教育レクチャーズ—いま、あらためて考える英語教育』

第一部

阿部 公彦（東京大学文学部教授）

「なぜ私たちの英語は『失敗』するのか？」

第二部

静 哲人（大東文化大学外国語学部教授）

「英語の歌で発音が良くなるって本当ですか？」

～グルグル・メソッドで歌わせる授業の理念と実践～

2018年7月7日、成蹊大学文学部スペシャル・レクチャーズ第一回として、『英語教育レクチャーズ—いま、あらためて考える英語教育』が4号館ホールにて14時から開かれた。第一部は阿部公彦先生（東京大学文学部教授）が「なぜ私たちの英語は『失敗』するのか？」という題で講演を行った。阿部先生は英米の詩を研究の中心にしているが、昨今は『史上最悪の英語政策—ウソだらけの「4技能」看板』（ひつじ書房）の出版やTwitterの発言を通じて、日本における英語教育の現状を精密かつ誠実に批判、もしくは今後の動向に対し働きかけている。ただし、講演は国の方針とそれに携わる（または、これから携わろうとする）企業の裏に透けて見える「四技能主義」に対する告発が全編にわたり展開されたわけではない。むしろ、その主義を冷静に検討するレンズを授けてくださったように思える。以下、その具体的な内容を記していきたい。

教育が改革されるときは既存のそれに何らかの失敗や欠陥がみつめられる場合である。だが、阿部先生は「その前段階なのに、『英語ができない』と苦情を言っているだけでは？」と疑念を提示することから講演を始めた。日本人は英語教育に失敗し（てき）たと断言してしまうとき、特に二つの誤解が頻発すると阿部先生は説明する。それは「訳読文法主義／会話重視。どちらか選べし!」、「学校英語より『実用英語』!」というものだ。この二点に共通することは、いずれも「読解／会話」、「非実用英語／実用英語」といった二項対立の発生が、そのまま誤解の基になっているということである。

このような対立からまずは退避し、或る論点から英語学習を捉えなおすことでその対立自体もほぐしてみたい。これが阿部先生の論旨である。その論点とは、『声を読む』という視点である。日本語の声=話し言葉は日本語の書き言葉と（さまざまな歴史的事情で）隔たりがあり、そのため言文を一致したいという意識が社会に反復して現れてきた。阿部先生は言文分離の一例として、

過去の講演を文字起こししたスライドを、編集の前と後に分けて見せた。編集前の活字の羅列はまるで書き言葉の文章とは呼べず、「日本語の話し言葉は書き言葉と違うところで行われる」ことを示したのである。一方で英語話者は書き言葉と話し言葉の差異をあまり気にしていない。このことを阿部先生は指摘し、そのために「日本語の『言文分離』間隔を英語にあてはめ、Spoken English, Written English を過度に分ける誤解」が生じてきたのではないかと説明した。

元来、西洋は声で何かを為すことへの意識、その重要性が歴史的に強烈な文化圏である。では英語は「話し言葉」が有力なので、やはり Spoken English の運用力養成に比重をかければ良いのだと、二項対立のうちの片方を選んでしまいそうな誘惑に駆られる。だが、実状はそうではない。そのような地場において、ものを書くという行為は、「口頭でものを言うときの表現の力みみたいなものに依存した文章の書かれ方」が期待され、推奨される。一方でものを話すという行為は「マナー」、「様式性」、「洗練」、「センテンスを言い切る」感覚を日本語よりも強く求められる。すなわち、英語という言葉が織りなす世界観において、書くことは話すときに気を付けるような要素に依存しているし、話すことは書くときに気を付けるような要素に依存している。私達が固い頭で思っている以上に英語という言語は、書くこと／話すこと、という対立が常に既にほぐれているのだった。

したがって「声を読む」という意味も明確になるだろう。阿部先生は英語学習の（商業主義に必ずしも依ることのない）力点はリスニングであるとおっしゃったが、これは「四技能主義」的な立場からの発言ではない。書くことと話すことがほぐれている言葉の世界にあって、誰かの発信する言葉もまた読むように聴くことが理解の近道なのである。具体的に阿部先生が提示したりスニング法は「さまざまな単位に区切って聴く」というシンプルな方法だ。ただ、講演後に振り返ると、人はどこに（なぜ）スペースを空けて言葉を操るのか、それがどのように（なぜ）上手く届く（かない）のか・受け取れる（れない）のかということなど、ひとつひとつ、奥が深く思える。

二項対立のように見えるものが実はそうではないということを明らかにしていくこと、当たり前のように思えることの奥行きを照らすこと。阿部先生の講演には文学の勘所が詰まっていたように思う。もちろんここでの「文学」とは文学作品のことではなくて、「文」＝言葉を「学」ぶために立ち止まったり耳をすましたりする態度のことである。

（以上、板垣 真任／成蹊大学文学研究科・英米文学専攻・博士後期課程）

英語教育レクチャーズの第二部は、静哲人先生（大東文化大学外国語学部教授）による「英語の歌で発音が良くなるって本当ですか？ ～グルグル・メソッドで歌わせる授業の理念と実践～」だった。大教室での限られた授業時間の中で、どうすれば個々の学生に効率的に、そしてピンポイントに指導を行うことができるのか。そのような問題意識から考案されたのが、指導者が文字どおり教室をぐるぐると回りながら、学生一人につき5秒ほどの指導を施していく「グルグル・メソッド」による発音の授業である。

その実践の前提として、静先生は、英語という言語における「音節の感覚」を理解することの重要性を強調する。日本語と英語、両言語においても、子音と母音のかたまりによって音節が形成されるという法則に変わりはない。異なるのはその感覚だ。例えば“steak”という一音節の英単語は、カタカナ語では「ステーキ（su/te-/ki）」と三枚に切り分けられて発音される。日本語の場合、子音のあとには必ず母音が生じ、英語のように子音で音節が終わることはない。にもかかわらず、多くの日本人は、日本語において正しい「音節の感覚」を英語の発音にまで持ち込んでしまうため、自然な英語のリズムをつかむことが難しいのだ。

では、頭で理解したこの感覚を、われわれの身体感覚として身につけるにはどうすればよいのだろうか。その感覚を養うためには、英語の歌がメインの教材になりうる、と静先生は指摘する。歌詞に使われた言葉の音節数は、基本的に、その歌の音符の数と一致しているからだ。講演が行われた4号館ホールでは、日本のポップ・ミュージックと洋楽とを比較しながら、音符と音節の関係を歌で体感しようとする試みがなされ、多くの聴衆が自然と歌を口ずさんでいた。

レクチャーの後半では、メソッドを用いた実際のコーチング風景が流された。授業で使われる歌は、アップテンポの曲が適しているのだという。テンポの速い歌は単に歌いやすいだけでなく、教師が教室を回る中で、学生の発音のチェックポイントを増やすためにも役立つからだ。音符の数は、指導の機会にも直結しているのだ。個々の学生を指導しているあいだ、他の学生たちはすぐに回ってくる自分の番に向け、各自熱心に練習に励んでいる。何度も訪れる個人指導の機会が、学生たちのモチベーションの維持に繋がっているように思われた。体全体を揺らして英語のメロディに溶け込もうとする学生たちの姿は、メソッドを使って「歌わせる授業」が、学生たちにとっての歌いたくなる授業であるということを賑やかに証明していた。

限られた時間の中で、いかに指導の機会を増やすか、いかに集団から個人を取り出すのか。「グルグル・メソッド」の根底には、教育の現場から発せられるさまざまな問題意識が流れている。本

講演は、歌うことを通して英語の発音を改善するための具体的な指導法を提案するものであった。

(以上、田浦 紘一郎／成蹊大学文学研究科・英米文学専攻・博士後期課程)